

# つなぐ「愛の手」

里親ケースワーカーのまなざし ③

## 養育の受け入れ

里親は生みの親とは異なり、子どもの成長の途中から養育を引き受ける難しさがあります。受け入れ当初

深めることに時間をかける必要があります。

M君は幼い頃から親と離れ、施設での生活が続いていました。このままでは家庭生活を経験しないまま社会に出ることになるのではないかと、里親委託を考慮することになりました。

小学3年生の時に里親との交流が始まり、週末を里親宅で過ごすようになりました。初めての夏休み、里親夫婦と3人で少し遠出した時のことです。

はしゃいでいて小遣いの入った財布を紛失。遊園地では乗り物パスポートが見当たらずに怒り出しました。夫妻にとっても楽しい

ひとときと、これからの生活の大変さを理解する機会となりました。夫妻は「私たちとは9年間のブランクがあるのだから、じっくり」と話し合い、覚悟を決めました。

一方でM君は好きになつた里親との生活に踏み切れない様子が見られました。住み慣れた施設を離れる踏ん切り、自分の目の前にはいない生みの親に対する気持ちの整理も必要でした。

この点は大切なことなので、私たち関係者も丁寧に対応していきました。「里親さんの家で暮らすことは自分で決める」というM君の言葉を受け、里親との生活が始まりました。

けんかつ早く、勉強は苦手。里母は諭したり、手助けをしたりする中で、常に子どもを信頼し、行動を任せる

# 子どもの気持ちをおくみ取る

よう心掛けました。

暮らしが1年半が過ぎた頃、M君は「この家に来て変わったのは、けんかしなくなつて優しくなつたこと」と自ら言うほどに変わりました。そして「自分の生い立ち」という作文にこうつづりました。

「生んだお母さんをうらむより生んでくれたことに感謝する気持ちがわいてきました」

(家庭養護促進協会主任ケースワーカー・米沢普子)

◇次回は14日に掲載します。



イラスト・竹内永理亜

には「赤ちゃん返り」や「試し行動」があり、今までできていたことができなくなつたり、すねたり、怒つたり、食べ物や遊びにこだわりを強くみせたりといったことがよくあります。それは子どもが、里親が自分をどこまで受け入れてくれるのか、自分はどうすればいいのかを確かめる行為だと考えられています。年長の子どもの場合、それまでに愛された実感が乏しく、生活環境を転々として特定の大人と継続した関わりが持てず、人間関係を